

講演 「本」って何？

—メディアとしての書物—

1. 本の歴史：粘土板から電子本まで

若松 昭子

1.1 記録の始まり

では、本の歴史と題してお話をさせていただきます。

現在、本というと、たいていの人はこの形を思い浮かべると思います(図1-1)。長方形で、長いほうの一边が糊付けされていて、もう一方は、パラパラとめくることができるものです。



図 1-1 冊子体

この形を、冊子体(さっしたい)とか、冊子本(さっしぼん)、または単に冊子と呼びます。この形は、今からおよそ1600~1700年位前に考え出され、使われるようになったと言われています。しかし、このような冊子体が生まれるずっと以前から、人々は、考えたこと、感じたこと、伝えたいことを記録し、それを保存していました。

書かれたものという意味での書物は、身近なものに記録をしたのが始まりです。粘土や、石や、動物の骨、亀の甲羅、木や竹、時には布などに文字が記されました。記録を書き記すことができるもの、ここでいう粘土、石、動物の骨、亀の甲羅などは、記録メディアと呼ばれます。

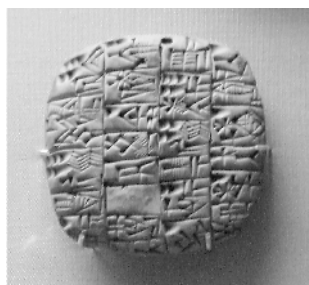


図 1-2 粘土板と楔形文字

これは、約2500年前の粘土板です(図1-2)。今のような文字はなかった時代で、三角系を組み合わせたような文字が刻まれています。この形は、楔(くさび：物と物とをつなぎ合わせるもので、釘の役目をし

ます。三角錐やV字の形をしていいます)の形によく似ているところから、楔形文字(くさびがたもじ)と呼ばれます。楔形文字が刻まれた粘土板は、主に古代メソポタミア文明の地で使われていました。

文字が刻まれた石として有名なものに、ロゼッタストーンがあります(図1-3)。1799年、ナポレオンのエジプト遠征軍によってロゼッタという村で発見され、その名前がつきました。書物というには大きすぎる石碑で、高さ114センチ、横72センチ、厚さ28センチ、重さは760キロもあります。この石はちょっと変わっていて、一つの内容が3種類の文字で記されています。古代エジプト文字のヒエログリフ、古代



図 1-3 ロゼッタストーン

民衆文字、そしてギリシャ文字です。ヒエログリフは、ピラミッドの壁や、古代エジプトの彫刻にも度々見られる文字ですが、古代エジプトが滅んでからはそれを読める人はいなかったし、鳥や動物の形をしている文字もあるので、一種の幾何学的な模様と思われたりしていました。ロゼッタストーンが発見されたおかげで、ヒエログリフの解読が可能になり、数千年前の古代エジプトの人々の暮らし方や考え方がわかるようになってきました。その意味でとても貴重な石です。

1.2 パピルスと卷子本

粘土板や石などは、重いし、かさばるので、持ち運びには不便です。また、落としたりすると壊れたり欠けたりするので、文字が読めなくなってしまいます。そこで、ヨーロッパでは、軽くて、もつとたくさんの文字を記すことができるパ



図 1-4 パピルス

ピルス(図1-4)が使われるようになりました。パピルスは、エジプトに多く生え

ていた植物で、エジプトでは5メートルくらいまで大きくなります。この茎を短冊に薄く切って、縦と横に井桁に組み合わせてぎゅっと押し付け、それを乾燥させて使います。

パピルスは軽いし、情報量が多ければどんどん継ぎ足すことができるので便利ですが、もろいため破れやすく、綴じることができません。そこで、ぐるぐる巻いて保管することになります。これを卷子本(かんすぼん)、または卷子、巻物といいます。しかし、卷子本には欠点がありました。読み直しをするためには巻き戻さなければならないとか、何度も巻きなおしをするうちに破れてしまうとか、ぐるぐる巻きなので見たい箇所を探しにくい、つまり検索には向かないなどの欠点です。そこで、西洋の人々は、パピルスよりももっと丈夫で保存にも便利な記録メディアを考えだしました。

1.3 パーチメントと冊子体

2世紀から4世紀にかけて、パピルスに代わり、動物の皮をなめしたものが使われるようになります。英語ではパーチメント、羊の皮が多く使われたので日本では、「羊皮紙」(ようひし)とも呼ばれています。これは、昔の手書きの本のなかの絵ですが、パーチメント商人とそれを買う客の様子が書かれています(図1-5)。パーチメントはパピルスに比べるととても丈夫で長持ちします。裏うつりが少ないので両面に文字を書くことも、間違えれば簡単に文字を削り取ることもできます。この絵(図1-6)は、パーチメントに文字を書いている姿ですが、右手にペン、左手



図1-5 パーチメント商人



図1-6 写本の制作

にナイフを持っています。ナイフはいわば現在の消しゴムで、間違っただけの文字を削り取るためのものです。

3世紀から4世紀にかけて、記録メディアはパピルスからパーチメントに変わっていきますが、それとほぼ同時期に、書物形態は卷子本から冊子体へと取って代わります。冊子体の書物は、それ以後ずっと人々に親しまれて、現在でも「本」というと、冊子体のイメージが浮かびます。さまざまなモノが時代と共に形を変えていく中で、冊子体という本の形は1500年以上も続き、現在もなおその形を保っています。冊子体という書物の形は、どうしてそんなに長い間変わらなかったのでしょうか。

冊子体のよい点はいろいろあります。例えば、一冊に盛り込める情報量が多いこと、また保存に便利なことです。冊子体は立てて置くことも横に積み重ねることもできます。小型になると、持ち運びが簡単になり、どこでも読むことができます。電車の中でもトイレの中でも読めるのです。また、どんな格好でも読めます。机の上において読むことも、寝転がって読むこともできます。冊子体の書物は、卷子本とくらべ、ずっと自由度が高いのです。

ほかにも、全体を一読できる、複数のページを同時に見ることができる、本全体の分量や自分の読んでいる位置がわかる、読みたい箇所へすぐ飛べるので検索しやすい、しおりやメモを簡単に挟める、などの利点があります。コンピュータが登場するまで、冊子体の書物は、情報を記録するにも、情報を持ち運ぶにも、また情報を保存する上でも、大変便利なメディアだったと言えるでしょう。

今から500年位前まで、本は、人の手によって、一字一字丁寧に書かれました。こうして手書きで作られた本を「写本」といいます。写本は、たいいてい、文字だけでなく、きれいな挿絵や、欄外の模様などが描かれていて、大変きれ

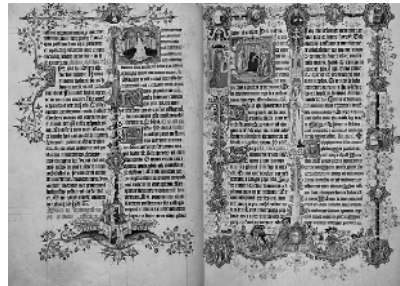


図 1-7 写本の例

いに飾られていました。この本には金箔も使われています(図1-7)。写本は、手間隙かけて作られるので、あまりたくさんは作れません。そのために、本は貴重品として、よほどお金持ちか王様や貴族など権力のある人しか持つことができませんでした。

1.4 印刷本の時代

15世紀の中ごろに、それほど労力や時間をかけずにもっと多くの本を作れないだろうかと考えて、ドイツのグーテンベルクという人は、世界で初めての印刷本を作りました。グーテンベルクが最初に印刷した本は聖書でした。グーテンベルクの聖書は、一ページの行数が42行あることから、42行聖書とも呼ばれています。印刷術の発明は、本の大量生産を可能にし、知識の伝達や普及を助け、経済、学問、文化を大きく発展させることとなります。

ドイツで発明された印刷術は、15世紀の終わりまでにヨーロッパのほとんどの都市に広がりました。印刷が開始されてからたったの50年ですから、長い書物の歴史を考えると、これはあつという間の出来事といえます。それ以降、今日まで約500年の間、印刷文化の時代が続くことになるのです。また、このころようやく、西洋でも紙が使われるようになってきます。 parchments は生き物から作られるので大量生産ができません。そのため値段も高かったのです。紙は、大量生産が可能で値段も比較的安かったし、インクを適度に吸い込むので、印刷に大変適していました。そのため、印刷術が各地に広がっていくのと同じ頃、記録メディアも parchments から紙へと変わっていきました。

ところで、印刷術の、なにがそれほど画期的だったかということ、それは活字を使うという点です。一文字一文字を組み合わせて文を作りますが、木版画に文字を彫って印刷するのと違って、間違った文字や、磨り減った活字を簡単に取り替えられます。一度組んだ活字をばらして組み替えると別の文章を作ることもできます。つまり、とても経済的なシステムなのです。技術が進むにつれて、活字はどんどんスマートになり、また小型にもなりました(図1-8)。それに

よって、文字が読みやすくなり、本は小さくますます携帯に便利になりました。

印刷本は、形は写本と同じ冊子体をしています。しかし、最初は写本と見分けがつかないような印刷本であったものが、いろいろな印刷者の工夫が重なって、

次第に改良されていきました。本に名前がつくのも、本の顔である標題紙(タイトルページ)がつくようになるのも印刷本からです。標題紙には、書名のほかに、著者名、出版地、出版者、出版年なども記されて、その本についての著者や出版者の責任や義務がはっきりと示されるようになります。ほかにも、ページ番号、目次、索引などの便利な機能がつけ加えられるようになります。こうして、15世紀の終わりには、印刷本は、外見は写本と同じ冊子体でも、中身は写本と違った近代的な記録メディアへと生まれ変わったのです。



図 1-8 大小の文字

1.5 電子本の時代

人々は、印刷本の便利な機能に500年以上も親しんできています。20世紀後半には、コンピュータが登場し、情報の記録、伝達、保存の方法や仕組みにも大きな変化が起っています。コンピュータで読み書きできる電子書籍も登場しました。携帯小説も電子書籍の一つですが、携帯小説に比べて従来の電子書籍はあまり普及しているとはいえません。つまり、コンピュータの画面が、これまで人間が慣れ親しんできた冊子体にとって代わるのはそう簡単ではなさそうだといいでしょう。電子書籍を読みやすくするためのいろいろなソフトが開発されていますが、そのなかでも、現在の「本」の機能や形態に少しでも近づこうと工夫がなされている点が面白いと思います。

例えば、これは、「ごんぎつね」の電子書籍版です(図1-9)。青空文庫というWebサイトで、誰でも無料で読むことができます。でも、この形式は、ちょっと読みづらいですね。



図 1-9 電子書籍 HTML 版



図 1-10 電子書籍冊子体形式見開き

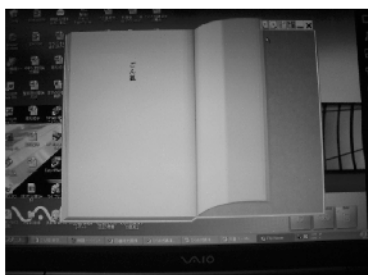


図 1-11 電子書籍冊子体形式版

最近では、画面下の「次へ」をクリックすると、次のページが開くこんな形式で読むことができるソフトも開発されました(図1-10、図1-11)。しかもページを繰るときの音まで一緒に流れます。これはコンピュータ上で読書をしようとしているのに、まるで冊子体の本を開いて読む時の感覚と同じですね。

今は、コンピュータによって、本の可能性が広がってきています。しかし、作る側にとっては、長年親しんできた印刷本のよい点を残しながら新しい機能をどう加えていけるだろうか、また使う側にとっては、多様なメディアの中で

「本」でしか味わえないものがあるとしたらそれは何だろうか、ということを経後の課題として考えていかなければならないのだろうと思います。

(本稿は、当日の講演をもとに追加修正を加えています。特に、講演時の画像と一部異なる画像を使用しています。また説明もそれにあわせて変更した部分があります。)

図版

- 1-1. Windows版クリップアート素材より
- 1-2. 大英博物館にて筆者自身で撮影つづけて(2006.9.2)
- 1-3. 『大英博物館』British Museum Press, 1997, p.3
- 1-4. 神戸パピルス研究所<http://www.kobe-papyrus.org/papyrus-6.html>(2007.11.20)
- 1-5. Browne, Michelle P., The British Library Guide to Writing and Scripts; history and techniques. The British Library, 1998, p.68
- 1-6. Hamel, Christopher de., Medieval Craftsmen; scribes and illuminators. The British Library, 1992, Front cover.
- 1-7. Browne, Michelle P., Sherborne Missal; turning pages on CD-ROM. The British Library, 2002, 1disc:CD, p.68 and p.71
- 1-8. ブロックフィールド著『文字と書物』浅葉克己訳 同朋社 1999 p.39
- 1-9. 青空文庫 『ごん狐』 <http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/card628.html>
XHTMLファイル(2007.11.20)
- 1-10. 青空文庫 『ごん狐』 <http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/card628.html> エキ
スバンドブックファイル(2007.11.20)
- 1-11. 同上